

一九四六年四月、東部ドイツにおけるドイツ共産党

とドイツ社会民主党との合同について

上 杉 重 二 郎

- 一 両労働者党合同の理論的意義
- 二 合同に対する社会民主党員の態度
- 三、ドイツ社会主義統一党創立の歴史的意義

社会民主主義政党と共産主義政党との合同の先駆的な例として、一九四六年四月に行われた、ドイツ東部におけるドイツ社会民主党（SPD）とドイツ共産党（KDD）との合同は、世界的な意義を持っている。小論においてはまずこの統一の理論的な意味が、次いで、わが国にははなはだ不十分にしか知られていない、この合同の歴史的経過が叙述される。

一 両労働者党合同の理論的意義

第一に指摘されねばならぬことは、この二つの労働者党の合同は、両党の統一行動（Aktionsinheit）の最終的な成果であり、さらにこの統一行動は両党を含め、かつ両党の影響下にあり、あるいは影響下でない労働組合諸組織の統一戦線（Einheitsfront）の中核をなし、したがって中小農民、都市小ブルジョアまたインテリゲンチヤないしは

一九四六年四月、東部ドイツにおけるドイツ共産党とドイツ社会民主党との合同について

一部の資本家をも包含した広汎な人民戦線 (Volkfront) の核である」という事実である。

第二に強調されることは、つぎの点である。すなわち、「統一行動政策は、マルクスレーニン主義諸政党の戦略・戦術の絶対的な構成部分だ」ということであり、この指摘は、右派社会民主主義者や保守的反動がこの政策を「デマに満ちたスローガン」にすぎないと非難を加えているがゆえに、いっそう必要である。

ところで、この労働者階級の統一という問題がドイツにおいて特に重要な意味を持ったのは、最初はドイツ社会民主党内に発生したラサール派と労働者派との闘争の時期であった。後に世紀の変り目以来ドイツ資本主義が帝国主義の段階に入り、それとともに日和見主義の勢力が強まり、やがて第一次世界戦争勃発とともに、レーニンによって「崩壊」と規定されるような現象が党内に顕然と生ずるにいたったとき、カール・リープクニヒト、ロザ・ルクセムブルクに率いられるスパルタクス・グループが生れて、社会民主党をマルクス主義の基本線に立ち戻らせようとしたが、ついにこのグループは分離して、別個にマルクスレーニン主義的大衆党を創立することとなった。この過程においても、労働者党の分裂と統一との問題は、緊急かつ最重要の問題として討論され、実践において争われた。

さらに戦後危機の時期においてもドイツ共産党は一貫して統一戦線の結成を主張した。たとえば一九二二年のカップ一揆にさいしては共産党および社会民主党的影響下にある労働者大衆が中心となってゼネラル・ストライキが敢行され、軍国主義者の陰謀が粉碎されたのは、なによりも右の統一戦線政策に負うている。

しかしながら、ワイマル共和国時代を通じて、ドイツ社会民主党右派幹部は共産党の提唱を終始却け、その結果ドイツにおいては労働者階級の統一も、したがって広汎な人民戦線もついに成就するよしなく、一九三三年一月におけるヒトラーの政権掌握を許した。ドイツ共産党は、一九三五年コミンテルン第七回世界大会におけるディミトロフのテ

ーゼに基き、その直後に開かれたブリュセル党協議会において統一戦線および人民戦線戦術をいそそう精緻に、かつ堅固に実行することを決議し、その成果はたとえば「自由ドイツ」国民委員会(Nationalkomitee des "Freien Deutschland")の形成にみるような、共産黨員、社会民主黨員、労働組合員、進歩的ブルジョア民主主義者、反ヒトラー闘争者などの統一行動となって現われた。⁽⁴⁾

このように統一行動、統一戦線の問題は、なかんずく二〇世紀に入ってから、ドイツ労働運動の最重要の問題となっていたが、ここではそれらについては必要なかぎりにおいて断片的に触れるにとどめ、論点を標題に示した問題に限ることとする。

さて、最初に述べたように一九四六年における二つの労働党の合同(Vereinigung)は、ここにいたるドイツ労働者階級の統一行動の最終的結論とでもいうべきものであるが、しかし、これはそれ以前のすべての統一行動と質的な差異をもった。その違いはどこに存したのか？ ドイツ共産党は徹底して労働者階級の統一を要求し、これをドイツ社会民主党に対してはもちろんサンヂカリストあるいは無党派の労働組合員またセクト的な共産主義者にも呼びかけてきたが⁽⁵⁾、しかしその際共産党はつねに自分はプロレタリアートの独裁を目指して闘争するものであることを隠すことなく、自己と社会民主党その他の労働者組織との思想的な相違にもかかわらず、たんに共通の日常的要求のために「ただちに容赦ない闘争⁽⁶⁾」を行うことを求めたのであった。すなわち、共産党と他の組織との思想的相違を前提とするのみならず、この相違が統一行動の継続の過程においても存続することを承認していた。

これに反して一九四六年の合同の場合は、文字どおりドイツ社会主義統一党(Sozialistische Einheitspartei

Deutschlands)が誕生するのであって、この党の内部に思想を異にした分派の存続を認めるものではない。ドイツ社会民主党員が非レーニン主義的な社会民主主義思想を克服することが合同の第一の前提であり、したがって社会主義統一党のイデオロギーは革命的マルクスレーニン主義であって、ドイツ共産党の思想とドイツ社会民主党のそれとの折衷、もしくは混合物ではない。⁽⁷⁾ いわばこの合同によって二つの労働者党の統一行動は止揚されているのである。

このような事情はすでに一九一八年のドイツ十一月革命の後における、ドイツ社会民主党からのスバルクス団の組織的分離の際にも起っている。前述したようにドイツ帝国主義の強烈な影響の下に、日和見主義勢力は急速に強化され、ドイツ社会民主党は事実上同一の世界観によって統一された労働者党ではなくなってしまった。リーブクネヒトやルクセムブルクはこの日和見主義を理論的に批判し、また実践を通じて批判を加えたが、しかし組織的な分離をためらい、ついに十一月革命の決定的瞬間にドイツ労働者階級はマルクスレーニン主義の大衆党を持つことができなかった。レーニンがスバルクス団のこの態度を批判し、かれらに助言を与えたことはよく知られている。そのレーニンはロシア社会民主主義者の思想的統合について、すでに一九〇〇年に次のように述べているのである。すなわち、

『統合するまえに、また統合するために、われわれはまず決定的にまた明確に、分界線を画さなければならぬ。そうしないならば、われわれの統合 (Einigung) は、げんざい存在している混乱を覆いかくし、その徹底的な除去を妨げる架空のものにすぎないであろう。⁽⁸⁾』

ドイツ共産党の分離と創立とは一見ドイツ社会民主党の二つの労働者党への分裂のようであるが、それはマルクスレーニン主義的労働者党を創設し、これへドイツ独占資本の思想的影響を受けない労働者大衆を吸収して、将来に

おける唯一の統一された労働者党の結成を少なくとも客観的に準備したものであったし、そのことは一九四六年東ドイツにおいて歴史的に証明された。「ドイツ共産党の三五年」が「共産党の創立は、社会民主主義とひより見主義とにたいする闘争において、マルクスレーニン主義に基礎をおいて労働者階級の統一を回復するための、決定的な一歩であった。共産党創立はドイツ社会主義統一党創設のための前提であった」と正しく指摘しているように、もしスバルタクス団が社会民主主義者の思想的混乱のさなかに坐して、分離の行動を起さなかったならば、このドイツ社会民主党はソ連軍によるヒトラー軍隊の粉碎の事実を目前にしても、とうてい人民民主主義革命を遂行することができず、労働者階級の思想的分断状態は継続したことであろう。

マルクスレーニン主義者が当初から変ることなく堅持している一つの原則は、労働者階級の統一行動なくしては、その日常的要求を十分に貫徹できず、ましてや独占資本(またドイツにおいては半封建的ユニカートゥムと軍国主義者)の権力を打倒し、人民民主主義革命を遂行することはできないということであり、統一行動を通じて独占資本に打撃を加えることによって労働運動内部のその影響力、すなわち日和見主義勢力を排除し、統一戦線をいっそう強化しうる、と考えられていた。この意味において、前述の共産党の公開状を拒否しつつ、社会民主党がこの提案を「戦術的な奸計」であると誹謗し、あるいは共産党の政策における「原理的な転換」であって、社会民主党のコースに追隨するものと見下し、また独立社会民主党が共産主義者の従来の戦術の「完全な破産」を示すものと中傷し、さらに極左的な共産主義労働党がこれを日和見主義的、デマゴギッシュかつ幻想的だと受けとったことは、何れの党もマルクスレーニン主義が本質的に、いわばその構成部分として統一行動を要求するという事実を見なかったし、また見

ようとしなかったことを示している。⁽¹⁰⁾

これに対して一九四六年の合同にいたる過程の最終段階において、ドイツ社会民主党の伝統に生きてきた古い党员たちが、この合同によって自分たちはいわばその故郷に帰るのだ、ヴィルヘルム・リープクネヒトやアウグスト・ペーベルの時代に立戻るのだ⁽¹¹⁾、とこの統一を納得し、かつ積極的に推進するにいたったことは、興味なしとしない。すなわち、マルクスおよびエンゲルスの指導の下にあった統一されたドイツ社会民主党がそのマルクス主義的思想的土台を再びとりもどした、自分たちをブルジョアジーに結びつけていた右翼幹部の支配からいまや解放され、いわばわが家を名実ともにわがものとするのだ、という感動をもって、かれらは合同に踏み切った。

古いマルクスの社会民主党は、いまや新しい段階においてレーニンの戦闘的な革命党へと発展的に再現された。しかし、それならば——とひとは問うかも知れない——なぜ新しい党はドイツ社会主義統一党(SED)と呼ばれて、社会民主党とも共産党とも呼ばれなかったのであるか？ 私の質問に答えてドイツ民主共和国のある党员歴史家は次のように説明した。マルクス・レーニン主義的世界観を党のイデオロギー的基礎とするということは、ことに世紀の変わり目以来ひより見主義思想の強い影響の下にあった社会民主党員に対して思想的改造を要求することであった。そこで、その上新党を共産党と名付けるならば、かれらに二度シャッポを脱げということになる。かれの説明しようとしたことはこれだけで充分理解されると信ずるが、一言にしていえば社会民主党員に劣等感を与えないための戦術という面が強調されている。

しかし、私はこの説明は正しくないと思う。少なくとも充分ではない。というのは、新しい党は思想的にも組織的にも真正正銘の共産党であって、日本のブルジョア新聞などが「ドイツ統一社会党(共産党)」と括弧で示している

のは、ある意味では正しい。しかしながら、多年にわたるドイツ独占資本の圧力と奸計とより労働者党が二つに分裂し続け、その一つである社会民主党がブルジョア的思想の浸透という状況下にドイツ共産党と対立抗争して、その統一行動の要請を徹底して却けてきたが、いまや第二次世界戦争の敗北という新局面において、ついにこの対立が克服されて統一された新労働者党が生まれたという歴史を、この括弧を故意に無視している、ブルジョア思想家は意識的に合同の意義を歪め、いわゆる「強制合同」、すなわち権力による圧迫の下に馬鹿な、もしくは臆病な社会民主党員を無理に新党に吸収したのだ、と誹謗したのである。

この党がなぜ社会民主党と呼ばれなかったかについては、もはや説明の要があるまい。すでにエンゲルスが指摘しているように、社会主義と民主主義とは矛盾する概念であって、新しいレーニンの労働者党の名称としてはまったく適当ではない。このような可能性について一九四五年——一九四六年において討論されたという事実もない。

- (1) Reisberg, Arnold: Die Leninische Politik der Aktionseinheit, Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung (以下B Z Gと略称) 1/1963, S. 54.
- (2) Eichler, Willi: 100 Jahre Sozialdemokratie.
- (3) レーニン、第二インタナショナルの崩壊、全集第二十一巻。
- (4) Grundriss der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Berlin 1963, S. 191f.; 上杉重二郎訳、法政大学出版局 一九六五年(予定)
- (5) たとえば、一九二一年一月八日の「Rote Fahne」に掲載された「公開状」は、ドイツ社会民主党、ドイツ独立社会民主党、ドイツ共産主義労働者党、全ドイツ労働組合連盟(ADG)、自由ドイツ同盟(サンディカリスト)などに向けられていた。Vgl.: Reisberg: a. a. O., S. 60.
- (6) Reisberg: a. a. O., S. 61.

一九四六年四月、東部ドイツにおけるドイツ共産党とドイツ社会民主党との合同について

一九四六年四月、東部ドイツにおけるドイツ共産党とドイツ社会民主党との合同について

二五八

- (7) Ullrich, Walter : 9. November 1918 in Deutschland——die grosse Lehre, in : Die Entwicklung des deutschen volksdemokratischen Staates 1945——1958. Berlin 1961, S. 45.
- (8) レーニン、「イヌクラ」編集局の声明、全集第四卷、三八八ページ。
- (9) ドイツ共産党の歴史、青木文庫 一九五四年、二〇八ページ。
- (9a) Ullrich, W. : Zur Geschichte der neuesten Zeit. Bd I, Berlin 1955, S. 79~80.
- (10) Reisberg : a. a. O. S. 61 ; Polak, Karl : Zur Dialektik in der Staatslehre. Berlin 1963 は統一戦線がただ「ブルジョア的資本家的組織形態からの脱離を通じてのみ形成、発展しうることに」注意を促している。(S. 115)
- (11) Ullrich, W. : a. a. O. S. 312

二 合同に対する社会民主党員の態度

ヒトラー体制の十二年間はドイツ社会民主党員の良心的分子に対しても、またもとより共産黨員もしくはその影響下にあった労働組合員などに対しても、統一行動に堪んして強烈な自己批判の機会を与えた。十一月革命期もしくはそれにつづくワイマル共和国時代において、少なからぬ共産黨員は、自分たちが日常闘争においてのみならず、じつにバリケードを隔して闘った、その当の相手の社会民主党右翼指導者に対して党はどうして統一行動の提案をしなければならぬのか、と理解に苦しむ傾きがあった。[↑]しかしいまは強制収容所における、捕虜収容所における、亡命地における、そしてまた国内の地下における統一行動の具体的経験があった。

それならばなぜ一九四五年五月八日ヒトラー体制の崩壊の直後に、一つの合同労働者党が誕生しなかったのであるか？ 一言にしてこれに答えるならば、十二年間にわたる、反ファシズム、ヒトラー打倒の闘争を共に遂行したという経験だけでは、両労働者党の合同に進むためになお不十分であった。という意味は、いまや要求されていること

は、マルクスレーニン主義の基盤の上に立つ、異質のものを含まぬ合同であつて、たんなる統一行動ではないのであるから、兩者、ことに社会民主党員の側のイデオロギーの明確さが不可欠の前提であり、そのためには思想的教育と同時に社会主義への展望を持つ——たとえ当面の闘争目標がブルジョア民主主義の完全達成であるにしても——闘争を共にするという経験が必要であつた。

一九四五年六月十日に発せられたドイツ駐留ソ連軍政部最高司令官ジュエニコフ元帥の、有名な命令第二号は、ドイツ東部における新しい政治生活の展開の端緒となつた。合衆国およびイギリスの最高司令官があらゆる手段を尽して民主主義的労働者運動の發展を阻害したのに反し、この命令は

「一、ドイツにおけるソ連占領地域内においては、ドイツにおけるファシズムの残滓の終局的な除去と民主主義および市民的自由の土台の確立と、ならびにこのような方向において広汎な民衆のイニシアティブと自発的活動とを發展させること、これらを目標とするあらゆる反ファシズム諸党派の結成および活動が許される」と規定してゐた。

このポツダム協約に忠実に依拠した命令に従つて、ドイツ共産党は早くも活動を開始した。六月十一日には戦後建設の基礎をきずいた「反ファシズム的民主的ドイツ建設のための、ドイツ人民に対するドイツ共産党中央委員会の訴え」が発表され、十三日には中央機関紙「ドイッチェ・フォルクスタイトウンク」の第一号が刊行された。ドイツ社会民主党もこれにつづいて十五日、ベルリンにおいて新たに結成された党幹部団は、その中央機関紙「ダス・フォルク」に綱領的宣言を発表した。

ここで、従来わが国ではほとんど知られていない、社会民主党の側から合同への歩みがどのように進められたかを

見てゆくことは、意味なしとはしない。それはソ連占領地域においては社会民主党は軍政当局から圧迫を受け、その弱まったところをさらに合同を強制されたという、西側からの宣伝的伝説がかなりひろく信ぜられているからである。私はここで同党のヴェテランであり、戦後指導的地位にあり、本年七月八五歳をもって逝去したオト・ブホヴィツ(5)によって右の事実を語らせてみたいと思う。かれはその著書「ドイツ労働運動の活動家として五〇年」にも明らかに見られるように、妥協を知らない戦闘的な活動家であった。戦後はとくにザクセン州の党機関議長として全活動を指導した。この地方は「赤いザクセン」と古くから云われたようにドイツ労働運動の一中心地であり、戦後はとくに東ドイツにおいて大きな比重を持ったので、かれの体験は主にこの州のことに限られるけれども、全貌をうかがうに足りるのである。

ブホヴィツは右の体験を叙述した「兄弟よ、いまや手を一つに」のなかで、最初に注意を促していることは社会民主党の弱点ということであり、卑屈な気持からではなく、まず事実を認めなければならぬ、と云っている。かれは党の宣言を共産党の訴えと比較するならば、後者はドイツがその当時におかれた状況の下になにが必要かということをはるかに明確に把握していた、という。そしてかれはこの相違は、じつに一九三三年、すなわちヒトラーの政権奪取の年における両党の政策の差異からきている、と理解する。⁽⁶⁾

「社会民主党がワイマル時代の、破滅に導く政策をいよいよ最後まで支持していたのに反し、共産党の訴えはかの時代の誤謬を指摘し、かつ当然のことながら、当時共産党はこの政策をしばしば批判し、そしてこの政策のために不幸に陥るにちがいないと予言していたのだ、と主張できた。共産党はまた社会民主党に対し、強大化する国民社会主義（ナチス）に対抗して同盟を結ぶようにと繰返し持ちかけたが、いつも狭量な社会民主党指導部によって盲目的に

拒否されてきた、と指摘することもできた。」これらの事実は、むしろ歴史的に証明されている。

したがって、前にも触れたように、社会民主党員にとっては第一に自己のイデオロギー的改造が必要とされた。このサルト・モルターレは革命的闘争の熱火と、エンゲルスが「社会主義はそれが科学となって以来、ちょうど科学を学ぶように学ばねばならぬ」とした学習活動を必要とした。ブホヴィツは言う、

「私がいま公然と承認することは、老社会民主党員として私はあまりにもおそくレーニンとスターリンの文献の勉強を始めた、ということであった。」

この歎きはもとよりかれひとりにとどまらなかつた。戦後の破滅的な窮乏と経済再建のための繁忙にもかかわらず、多くの社会民主党員はその時間とエネルギーとをマルクスレーニン主義古典の研究に割いた。このことは、ヒトラー支配の十二年間がイデオロギー問題を真剣に研究する可能性を労働者から奪い、いな大部分の者がナチスのイデオロギーに毒されていたことや、一九三三年以前といえどもワイマル共和国の支配者によってマルクス主義の意識的な偽造と歪曲とが行われていたことを顧慮するならば、一般の党員にはなおいっそう妥当したことであった。

ヒトラーの遺した財産はただ頹廢と破壊とであった。ウルブリヒトが指摘しているように、廃虚の石や煉瓦の山を取り片づけるよりも、人々の心のなかの廃墟を片づけることの方がはるかに難しかった。多くの人々は「ドイツよ、どこへゆくのか？」とみずから問いかけることさえなく、ただ食物と水と住居とを求めてさまよっていたのであるから、ここで社会主義への展望をもった、経済的、政治的そしてイデオロギー的闘争を通ずる生命がけの飛躍を党員に求めることは、ブホヴィツはじめ良心的な社会民主党幹部にとっては、困難を極めた事業であった。ことにザクセン州の首都ドレスデンはひどかった。ブホヴィツがブランデンブルク監獄から立ち戻ってみると、ただアメリカ、イ

ギリス空軍の大じゅうたん爆撃によって生じた廃墟を見出しただけであった。⁽¹³⁾ 党の結成と活動とは第一に物質的に困難を極めた。すなわち、ベルリンとの間にはほとんど汽車が動いていなかったから、中央部と連絡をとることができず、党の宣言さえ数日おかれてようやく到着するありさまであった。通信も麻痺していた。それどころでなく、ドレスデンおよびその周辺の旧黨員と連絡しあうことさえ、幹部たちはだれひとりとして自動車を持っていないので、この上なく難しいことであった。⁽¹³⁾

ましては機関紙の発行ということは、これが黨員の教育、イデオロギー的改造のためには不可欠であったにも拘らず、ことに紙の不足のためにつねに障害にぶつかった。もちろん金もなく、事務所もなく、タイプライターもなければ、事務員を見つけることもできなかった。⁽¹⁴⁾ プホヴィツはまたつぎのように書いている、

「さいしょの金(五〇ライヒスマルク)をマイセンの同志が持ってきてくれた。これで私はさいしょの紙と鉛筆とを買うことができた」⁽¹⁵⁾

こうした窮乏を救ったのは、むろん第一に黨員自身であって、その献身にたいしてでプホヴィツは心から感謝をささげている。しかし、社会民主党に対するソ連占領軍当局の援助を特筆しなければならぬ。一九四五年六月にプホヴィツは、ザクセン州ソ連占領軍司令官ドゥプロフスキー將軍からそこへくるようにとの指示を始めて受けた。ドゥプロフスキー將軍の部隊はスターリンググラードから二〇〇キロにわたってドイツ軍と戦闘を続けて来た。いたるところでヒトラー軍隊の惨虐な破壊と殺人との跡をロシア人兵士たちは見えてきている。かれらはまた、ワイマル政府の社会民主党右派指導者の実行した政策の結果、ヒトラーが権力を握ったのだということも知っている。こう考えてプホヴィツは内心に圧迫感を感じたと語っている。⁽¹⁶⁾

けれども、ドゥブプロフスキー將軍はかれを歓迎し、社会民主党の政策について詳しく質ねた後に、いつでも助力を与えることができるかと約束してくれた。二回目の会見のときにはさらに具体的に、事務所と自動車とがなければ活動できぬだろうと、それらやガソリンなどを提供してくれた。⁽¹⁷⁾ これらの会見において「ただの一度もドゥブプロフスキー將軍は私に勝利者のような調子で命令したことはなかった。日常の諸問題や労働者階級の統一の問題に対する私の個人的な態度が、命令によって影響されるようなことは、これまたただの一度もなかった。」⁽¹⁸⁾ このソ連軍の態度によって社会民主党のヴェテランは、大いに勇気づけられたのであった。このようにソ連は二つの労働者党に区別なく支持を与えた。

その結果、当初五万の発行部数しかなかった、ザクセンの社会民主党機関紙は、すでに一九四五年十一月には三倍を超えて一六万部に達していた。⁽¹⁹⁾ 黨員数も男子五三、〇三九人、女子一三、七五一一人、計六六、七三〇人となった。⁽²⁰⁾ これらはただむかしの黨員が寄り集つたというのではない。活動的黨員がわずか数ヶ月の活動によって獲得したものであった。

しかしもとより社会民主党員が共産党との合同に踏み切るには、前述のように社会主義への展望をもつ民主的平和愛好的ドイツ建設のための統一行動という過程を経なければならなかったし、これこそもっとも重要な決定的なファクターであった。前に触れた一九四五年六月十五日の宣言においても「われわれと同意見のあらゆる人々、すべての党派と協力する準備があり、その決意をしている」⁽²¹⁾とされており、ザクセンでは六月二十五日に社会民主党再建準備委員会が創られたときに、ブホヴィツは党の組織委員会が共産党との連絡委員会を兼ねるようにと提案し、参加者一

同は、共産党との共同のための前提をつくり出すことはいまや自明のことであらねばならぬ、というブホヴィツの説明を了承した。⁽²²⁾しかし、まだ合同ということは直接日程に上らなかつた。それどころか、かれが失望したことには、なお多くの古い黨員は戦時中のさまざまの苦しい経験にも拘らず、かれらの旧右派指導者の政策に忠実であり、すでに久しく消え去ってしまった過去を信じていた。⁽²³⁾

けれども、本誌第十八巻第二号で紹介したような民主的土地改革やまたナチス、戦争犯罪人、独占資本家などの財産没収のための闘争のさなかにおいて、誰は共産党、かれは社会民主党などという区別は、問題にもならなくなつた。また統一行動を強化してさらに合同へ向うために、一九四五年末から翌年始めにかけて、多くの企業に両労働者党の共同行動委員会が作られるようになった。両黨員の共同の学習会や、すでに合同を意識して都市においても、また農村においても両党の共催の集会が開かれた。この歩みを強力に推進したのは、一九四五年十二月二十日、二十一日の両日ベルリンに開かれた両党中央委員会合同会議であつて、その議題の第一には労働者階級の統一が掲げられた。両党からそれぞれ三〇人の代表の出席したこの会議で採択された長文の決議は「いまや新しい時代の朝やけが始まる！」⁽²⁴⁾という句で終っていたが、事実この会議は合同の歩みを決定的におし進めたものであつた。社会民主党議長オト・グロテヴォールはつぎのように述べた。

「労働者階級の統一の必要については、もはや議論の余地はない、……一九四五年六月十九日における両党中央委員会の合意は、両党の相互了解の第一局面であつた。……この合意以来正確に六ヶ月たつて、十二月二十日、二十一日に両党中央委員会は共同会議のためにベルリンに会同した。……この間になされた諸経験は反ファシシヨ的民主的統一行動とことに両労働者党の共同という政策の正しさを立証した。……」

労働運動の統一党は準備されるべきである。この問題を研究するために、この六〇人会議は研究委員会を設けたが、これには両党からそれぞれ四人の代表が加わる。……新党の最小限綱領はドイツの民主的再建の完成であり、……最大限綱領は、徹底したマルクス主義の教義に従って労働者階級が政治的支配を行使するという道を通して、社会主義を実現することである。……

いまやドイツ労働運動の新しい劃期が始まろうとしている。……礎石は置かれている。建設は完成しなければならぬ。仕事を始めよう！²⁶⁾

社会民主党員の主流はこのようにして、思想的にも組織的にも、あすの合同の準備をととのえたのであった。この態度と右の会議の決定とは下部大衆や無党派の労働者を少なからず激励し、さらに各地においていっそうひんぱんに合同会議が開かれ、また両党員の学習会ももたれた。この学習会は共産党にも戦後急速に大量の青年が加入し、前術たるべき党员と一般労働者との思想的水準のほど同一となることをよぎなくされたことを思えば、この段階でこと大きな意義を持っていた。そのテキストには「共産党宣言」「ゴータ綱領批判」およびエンゲルの国家論などが使用された。²⁶⁾

この過程で「すでに一つの党のメムバーであるという感情」さえ生まれていたとはいえず、社会民主党の側にはなおさまざまの困難があった。一九一八年以来、二十数年の両党の抗争は、一部の老党员の間ではいわば感情のしこりとなって残っていた。その上一部の共産党员はワイマル時代の古い文書を引っぱり出してきて、社会民主党の同志に右派幹部の政治的罪状を繰り広げてみせたが、多くの社会民主党員はこのやり方に腹を立て、その影響下の労働者の間にも共産党员に対する不信の念が生じた。次にまたソ連軍が進駐し、新たにドイツ人の行政機関を設けた際には「当

時としては軍政局はまず共産党員を任命することにならざるを得なかった。」⁽²⁸⁾これを反統一派は利用して、行政機関内の両党の平等などという合言葉で、不信をあおり立てた。そこで右派幹部の過去の誤りを承認するものでも、共産党員の批判の調子に反撥し、これが統一闘争をむずかしくしていた。

しかし、なによりも両党の合同を妨害したものは、人民民主主義革命の進展を恐怖するアメリカ占領軍の支持を受けた西ドイツの社会民主党右派幹部およびこれと結合した東ドイツにおける党内の反対派の抵抗であった。この抵抗はきわめて巧妙であって、公開の席上では統一に反対するような言説を述べず、地下で攪乱工作を行い、暴露されると西へ逃亡した。ザクセンにおいては反対派はことにドレスデンとライプツィヒに根を下ろしていたが、その指導者はドレスデンの西南一〇キロのフライタール市長ヘンニヒや六月十九日のベルリン合同会議で社会民主党を代表したダーレンドルフなどであった。⁽²⁹⁾かれらは合同の後には旧社会民主党員を排除するという計画を共産党は秘密会議できめた、などというデマゴギーをとばして、両党の間を割くことに全力を尽し、⁽³⁰⁾あるいはブホヴィツの演説会の準備をサポータージュして流会にもちこんだり、⁽³¹⁾州委員会の秘書に秘かに一味を潜入させたりした。かれらの特徴づけるものは、むきだしの反共主義であり、なんとかして共産党の影響力を阻もうとしていた。ダーレンドルフが一九四四年七月二十日事件の陰謀に深い連絡を持っていた事実は、本論には直接にかかわりがないかのようであるが、このヒトラー暗殺事件が独占資本の指導の下に行なわれ、イギリス、アメリカ合衆国との講和、対ソ連戦の継続を目指したものであることを思えば、社会民主党右派幹部の救い難い反共主義の根深さを思わせる。⁽³²⁾

ベルリンの中央委員会合同会議の後、約一ヶ月ほどしてヘンニヒはオーベルラインスベルクの古城にザクセン州のあらゆる反対派の参加する秘密会議を召集したが、その数は別に大きくはなかった、会議はブホヴィツの罷免とその

後任とを決定した⁽³⁶⁾。かれらはまた、合同会議で両党はその党名入りの用箋などをすべて廃棄することを決めていたにもかかわらず、これを大量に隠とくして将来に備えた。それどころか、かれらは銀細工品、絨氈やそのほかさまざまな高価な品物を秘かに古城の地下室に盗み集めて西へ運び去るといふ犯罪行為をさえたためならず、これが発見された後にヘンニヒらは西ドイツへ逃げた。(ヘンニヒはヘッセン州の文化相となった)⁽³⁷⁾残った数人は逮捕されたが、むろん旧社会民主党員だから、という理由からではない。

これらの反統一活動の多くは、シニューマッヘルら西ドイツ社会民主党幹部によって操られていた。議長⁽³⁸⁾のシニューマッヘルはときには統一に反対していいと言ふこともあつたが、「全国党大会がこの問題を決定するのが、よりいっそう民主的だ⁽³⁹⁾」と主張していた。しかし、ブホヴィツがかれに指摘したように、アメリカとイギリスとの占領軍当局がこれを決して認めるはずはなかつたので、シニューマッヘルに従ふことは、東部における統一の進行にブレーキをかけることを意味した。シニューマッヘルはたんにこうして思想的影響を東部の社会民主党員に及ぼしたばかりでなく、秘密の連絡をライプツィヒやドレスデンの組織と保つていた⁽⁴⁰⁾。かれは東部における合同を阻止し難いと見た後は、この合同がソ連占領軍によって強制されたとの宣伝を強めたが、その目的は西ドイツ社会民主党下の労働者が全ドイツにおける統一に肯定的であるのを阻止することにあつた。シニューマッヘルのグループは、党員が中央委員会によって召集された、一九四六年四月の同党第四十回大会およびそれに引き続いて行われた合同大会へ参加するのを禁止したが、かれら右派幹部がこのようにあらゆる手段を尽して労働者階級の統一を妨害しようとしたゆえんは、じつはこの統一こそがポツダム協約に規定された、全ドイツの反ファシヨ的民主的再生を達成するのであることを、充分に知っていたからである。

このシューマツヘルらを西の帝国主義占領諸国は、当然のことながら積極的に支持した。かれらはその当時の国際国内的情勢下においてポツダム協約に署名せざるを得なかったけれども、すでに冷戦を開始しており、西ドイツは対ソ連の最重要基地として考慮されていた。したがって、東部ドイツにおける反ファッショ民主主義運動の波をいかなる手段を用いても阻止し、ドイツ独占資本の権力的地位を保持しつつ、その助けを借りて自己の占領者としての地位を守り続けようとした。しかしながら、単純にヒトラーの手段を繰り返すことはできなかった。この段階においてドイツ社会民主党右派の支持を得ることは、これがなお労働大衆に大きな影響力を持ち、かれらの間に議会的主義的幻想をひろめる能力を持つがゆえに、ことに決定的に重要であった。このようにしてシューマツヘルと西の帝国主義占領軍およびドイツ独占資本との利害は一致した。⁽⁴⁰⁾東部で社会民主党と共産党との統一が実現した後は、社会民主党右派幹部がアデナウアーのドイツ分裂政策に同調したこと、また現在もキリスト教民主同盟(CDU)と同じ外交政策をとっていることも、すべてここに帰因しているのである。

シューマツヘルらはその策動がついに失敗したのちも、ドイツ社会主義統一党および東ドイツの労働者農民政権に対する破壊工作中止しなかった。かれらの重要機関は現在まで存続する悪名高い「東部工作局」(オストビュロ)である。ザクセン州党委員会書記でありながらブホヴィツを裏切ったワルター・ラムもその多数の工作員の一人となっており、アメリカ、イギリスのスパイ、攪乱工作に従っている。⁽⁴¹⁾一九四七年に一人の工作員が東へ亡命してきて、かれの活動について告白したが、それによると、たとえば東部工作局はある日ザクセン州党委員会副議長アルノ・ハウフェから、ブホヴィツはちかぢかデンマークへハムブルクを通して旅行するから、そこでかれを逮捕しよう準備せよ、という手紙を受取ったという。⁽⁴²⁾当時かれを逮捕しようするのは、むしろ占領軍当局以外にはなかった。

- (1) Reisberg : a. a. O. S. 62
 - (2) Dokumente und Materialien zur Geschichte der Arbeiterbewegung. Reihe III, Bd. 1, Berlin 1956, S. 12 (以下Dokumenteと引用)。
 - (3) Ebenda, S. 14 f.
 - (4) Buchwitz, Otto : Brüder, in eins nun die Hände. Berlin 1956, S. 27.
 - (5) „Neues Deutschland“ vom 11. Juli 1964.
 - (6) Buchwitz : a. a. O. S. 27.
 - (7) Ebenda. S. 27—28.
 - (8) Vgl. Ulbricht : a. a. O. S. 48.
 - (9) Buchwitz : a. a. O. S. 30 und S. 42.
 - (10) Ulbricht : a. a. O. S. 318.
 - (11) Ebenda, S. 61.
 - (12) ドイツ・オーストリア、世界文化地理 第十卷、講談社 一九六四年 六六ページ参照。
 - (13) Buchwitz : a. a. O. S. 23—24, S. 32.
 - (14) Ebenda, S. 49.
 - (15) Ebenda, S. 52.
 - (16) Ebenda, S. 53—54.
 - (17) Ebenda, S. 54—55.
 - (18) Ebenda, S. 55 ; 西ヘルリンの「テレグラフ」紙の編集長アルノ・シヨルツもまた、ソ連軍政当局が一九四六年中に、ドイツ社会民主党をその政治的物質的便宜を与えた事実を記し、この党がソ連によって屈服を強いられたこととはないと証明している。
- Vgl. : Benser : Zur Entstehung der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands, in : Der deutsche Imperialismus

一九四六年四月、東部ドイツにおけるドイツ共産党とドイツ社会民主党との合同について

二七〇

und der zweite Weltkrieg. Bd. V, Berlin 1962, S. 19.

- (19) Buchwitz : a. a. O. S. 80.
- (20) Ebenda, S. 85.
- (21) Dokumente : S. 28—29.
- (22) Buchwitz : a. a. O. S. 33.
- (23) Ebenda, S. 21.
- (24) Dokumente : S. 354.
- (25) Ebenda, S. 361—64.
- (26) Buchwitz : a. a. O. S. 103.
- (27) Ullrich : Die Entwicklung des deutschen volksdemokratischen Staates 1954—1958. S. 64—65.
- (28) Buchwitz : a. a. O. S. 91—92.
- (29) Ebenda, S. 31 und S. 90.
- (30) Ebenda, S. 95—96.
- (31) Ebenda, S. 106.
- (32) Kotowski, Georg : Der Kampf um die Selbstverwaltung in Berlin. Ein Beitrag zur Vorgeschichte der Spaltung der Stadt. 1950, S. 180, zitiert in Benser : a. a. O. S. 23.
- (33) Buchwitz : a. a. O. S. 119.
- (34) Ebenda, S. 203—04.
- (35) Ebenda, S. 99.
- (36) Ebenda, S. 99.
- (37) Ebenda, S. 110, S. 125 und S. 133.
- (38) 一九四六年一月アメリカ占領軍クレイ將軍は、合衆国はドイツ社会民主党とドイツ共産党との合同を承認しないであらう、と声明した。同日、軍の機関紙「ノイエ・ツァイト」に合同反対のシューマッヘルの論文をのせた。二月二十六日にはシ

- キネバルクフリーデナウの統一活動家十一人がアメリカ憲兵隊によって逮捕された。Vgl. Wohlgemuth, F.: Zum Kampf für die Vereinigung der KPD und SPD, in: Der deutsche Imperialismus und der zweite Weltkrieg. Bd. V, S. 37.
- (39) Buchwitz : a. a. O. S. 135.
- (40) Ulbricht : Zur Geschichte……. S. 308—09 ; Stern, Leo : Der Einfluss der Grossen Sozialistischen Oktoberrevolution auf Deutschland und die deutsche Arbeiterbewegung. Berlin 1958, S. 273.
- (41) Buchwitz : a. a. O. S. 202.
- (42) Ebende, S. 204.

三 ドイツ社会主義統一党創立の歴史的意義

右のようなさまざまな困難にも拘らず、ついに両労働者党の合同が実現したのは、第一に労働者大衆の熱意であつて、多くの企業における集会では、ことに一九四六年に入ると、「いったいなを待っていなけりゃならないんだ？」と卒直な疑問がさかんに出るようになり、反対派に対する憤慨をぶちまけたが、これも当然のことであつた。いわばほとんど始めて自主的な立場で政治にかかわるようになった労働者大衆にとっては、二つの労働者党が対立抗争しなければならぬという理由はさらに呑みこめなかつた。西ベルリンとの隣接、そこからの宣伝活動という、もっとも複雑困難な状況にあるベルリンにおいてさえ、社会民主党の市委員会が共産党との合同について票決を求めたときに、六六、二四六票のうち反対はわずか一九、五二九票であり、しかもこの反対者のうち一四、六三六人は両党の同盟を主張していたので、合同にも同盟にも反対する党員の数は、五、五六八人、すなわち約八パーセントにすぎなかつた。¹⁾

かくして一九四六年四月十九日ドイツ共産党はベルリン市中央区のドイツ劇場において第十五回大会を、ドイツ社会民主党はそこから五分と離れていない、シュプレー河畔のシフパウエルダム劇場（ここを現在もプレヒトのベルリナ・アンサンブルが本拠としている）において第四十回大会を、それぞれ開いて最終的協議を遂げた後、四月二十一日、二十二日の両日にわたりアドミラル・パラスト劇場において、両党一、〇五五人の代議員の参加する合同党大会が開かれた⁽³⁾。

陰惨な封建的専制主義に対する近代市民の解放闘争をうたいあげた、ベートーヴェンのオペラ「フィデリオ」の序曲が終るとともに、舞台の両側から両党の議長ヴィルヘルム・ピークとオト・グロテヴォルとが歩みよって、全代表の拍手のうちに固い握手を交わした⁽³⁾。創立されたマルクスレーニン主義的労働者党は、その後三カ月にして早くも三〇万の黨員を擁するにいたった⁽⁴⁾。

この両労働者党の統一はこれまで観察してきたように両黨員の真摯な努力によって達成されたのだが、この統一が一つの歴史的必然であることを看過してはならない。労働者階級は本来共通の利益を持っており、したがって法的に共通の利益代表者、前衛を持つこととなる。労働者階級の統一は労働者の古くからの憧憬ではあるが、これは数人の観念論者の頭脳に源を発する計画ではない。それは労働者階級と全民族との生命にかかわりある利益から出ているいわば客観的な欲求に発し、必然的に充足されるべきものである。

しかし、なぜ客観的必然性が西ドイツでは実現されなかったし、現在にいたるまで分裂が続く結果となったのか？西ドイツの労働者の責任であろうか？周知のように西ドイツには重化学工業の基地があり、決して労働運動の空白地帯ではなかった。かれらは十分に労働運動の統一をかちとる能力がある。それではたまたま東部にのみ良心的な社

会民主党指導者が多かったというのであろうか？　しかし、これも事実ではない。東ドイツの多くの社会民主主義者が自己改造の機会を与えられ、みずからマルクスレーニン主義者として鍛えあげていったのに反して、西においては合衆国、イギリス、フランス帝国主義占領諸国の軍事的政治的経済的圧力によって反ファシヨ^⑤的民主的変革が阻止され、統一へ向う運動も直接に圧迫を受けた結果、東にいれば統一に踏み切ったであろう数多くの社会民主黨員が動揺して、右派幹部の影響下に留まり、過去三十年の不幸な歴史からなにかを学びとって自己改造する機会を失ったのである。こうしてみれば、東西の占領政策の相違が決定的な意味を両地域の労働運動の発展と民衆の福祉とに持ったことは、疑いの余地がない。ソ連の援助は、なによりもポツダム協約を忠実に実行する政策を堅持したところにある。

ドイツ社会主義統一党創立の意義を、第一書記ワルター・ウルブリヒトはつぎのように指摘している、

第一に、ドイツ労働運動におけるマルクスレーニン主義の歴史的勝利。(もともとこの合同はただちに困難なイデオロギー闘争が終ったことを意味しない。東部工作局その他西からのあらゆる使噓・煽動・破壊工作を念頭におくとき、この闘争がさらに強力に続けられねばならぬことは、明白である。)

第二に、これによってコンツェルン、大農業者、その他の戦争犯罪人の支配を根絶し、平和と民族的統一とを実現する前提が^⑦つくりだされたこと。

第三に、両党の統一は、労働組合その他の大衆組織の統一と闘争能力とを強めた。統一は「磁石のように無党派の多くの労働者、なかんずく青年を党に惹きつけた。」^⑧

第四、国家および経済ならびに文化生活における労働者の地位が固った。すなわち、労働者の指導的役割がいっそ

う力強く發揮されるようになった。⁽⁹⁾

第五、この結果、労働者組織を核とする反ファシシヨ的民主的諸党派ブロックの、ユニカーや独占に対する打撃力は強まった。ブルジョア諸党のなかにもぐりこんだ反動の代理人たちは組織から追い出された。⁽¹⁰⁾

第六、勤労農民との同盟が強化され、ユニカー制度を徹底的に清掃できた。⁽¹¹⁾

第七に、これはとくに重要なことであるが、この影響力が西に強くおよんだこと。合同大会の直後に統一を目指す運動は、ライン、ルール、ハムブルク、ハノーヴァ、マンハイム、ハイデルベルクおよび南バーデンなどの大工業地区において、著しい昂揚を見せた。⁽¹²⁾

さらに最後につけ加えるならば、この合同は、それぞれ条件は異なるのであるが、東ヨーロッパ人民民主主義諸国における党活動にも一つの大きな教訓を与えたのであった。

- (1) Ubricht : Zur Geschichte der neuesten Zeit. Bd. I, 1. Halbband S. 309.
- (2) Ebenda, S. 312.
- (3) Dokumente : S. 609—33.
- (4) Ubricht : a. a. O. S. 313, S. 319.
- (5) Vgl. : Borosniak, Alexander : Der Kampf um Artikel 41 der Verfassung Hessens, „Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung“ 3/1962. 西ドイツに於てのみ、反ファシシヨ的民主的変革が強く要望されたこと、しかしアメリカ占領軍の阻止にあつたこと、ボロソニャクは詳細に敘述している。
- (6) Ubricht : a. a. O. S. 317 und S. 318—19.
- (7) Ebenda, S. 319.

- (8) Ebenda.
- (9) Ebenda.
- (10) Ebenda, S. 320.
- (11) Ebenda.
- (12) Ebenda, S. 317—18. またイギリスの反共作家ピーター・ネットルは「……西ベルリンおよび西ドイツの社会民主党員たちは、新しい党に対する支持を表明していた」と述べている。ウルブリヒト前掲書に引用された Nettie, Peter : Die deutsche Sowjetzone bis heute. Frankfurt a. M. 1953, S. 47.